法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

ハンナ・アーレントの「政治的生」の現象学的研究 ： 「共通感覚」と「世界への愛」を手掛かりに

押山, 詩緒里 / OSHIYAMA, Shiori

(発行年 / Year)
2023-03-24
(学位授与番号 / Degree Number)
32675甲第557号
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2023-03-24
(学位名 / Degree Name)
博士(哲学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026655

法政大学審査学位論文の要約

ハンナ・アーレントの「政治的生」の現象学的研究

――「共通感覚」と「世界への愛」を手掛かりに

押山　詩緒里

本研究の目的は、ハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906-1975）の政治哲学の中心概念である「政治的生」（bios politikos）が、「共通感覚」（sensus communis）と「世界への愛」（amor mundi）の「共‐起源的」（co-original）な相互作用の中で現れることを、現象学的観点から解明する点にある。それによって本研究は、従来の諸研究では明確にされてこなかったアーレントの政治哲学の現象学的意味とともに、「政治的生」の意義とその出現するための諸条件を解明する。

アーレントの「政治的生」は、「現れの空間」（space of appearance, Erscheinungsraum）の中で現象する。この「現れの空間」は、単なる空間的な場という意味ではなく、人間の政治的自由と複数性が生き生きと現れることが可能になる場所としての政治的世界を意味する。

「現れの空間」としての政治的世界は、次のような意味で現象学的な「現れ」と「隠れ」の構造にある。政治的世界は異質で多様な人々の間を結ぶ「人間関係の網の目」（web）である。「網の目」は人々が沈黙しているとき、人々の間に潜在している。またこの「網の目」は、誰かが自由で平等な語りを実際に開始し、その語りを別の誰かが聴取し解釈するとき、潜在的状態から顕在的状態にはじめて転換する動的な構造をもつ。「網の目」としての世界は、自由な語りと聴取が現に行われている間にのみ顕現しうる、一回的で偶然的な言論空間である。換言すれば、世界は沈黙によって隠され、語りと聴取によってそのつど顕在化する。要するにアーレント独自の現象学的意味での「政治的世界が現象する」わけである。

本研究は、以上のアーレント独特の政治的世界の構造を解明するために、この構造を支える「政治的生」を現象学的観点から解釈することを試みる。筆者の理解によれば、「政治的生」は「共通感覚」と「世界への愛」の「共‐起源的」な相互作用の間でのみ、はじめて顕在化することが可能である。また本研究は、この「共‐起源的」な相互作用が「赦し」と「約束」の源泉を意味することも明らかにする。「政治的生」は、日常生活の場では異質な人々の間で潜在しており、「赦し」と「約束」の源泉である「共通感覚」と「世界への愛」が相互的に働く動的な営みによって、はじめて顕在化しうるのである。このような意味で、本研究は「共通感覚」と「世界への愛」が、「政治的生」および「政治的生」が営まれる場である「現れの空間」が顕在化するための「不可欠の条件」（conditio sine qua non）であることを解明する。

上述の「政治的生」、「共通感覚」、「世界への愛」の現象学的構造は、アーレントの政治哲学の根幹をなすにも関わらず、従来のアーレント研究史では注目されず、本格的に研究されてこなかった。また、アーレント自身も上記の構造を明示的に語っていなかった。本研究によって筆者は、上記の二重の意味で隠されていたアーレントの政治哲学の現象学的構造を明らかにする。それによって本研究は、アーレント自身と研究史上の不十分性を明らかにするとともに、その欠陥を補足することを意図している。

上記の目的のために、本研究は、従来のアーレント研究では看過されてきた次の三つの課題を併せて究明する。

第一の課題として、本研究はアーレントの「現れの空間」が、異質な他者と共に生きる人間の「政治的生」があらわになる場であることを明らかにする。アーレントは、古代ギ

リシャにおける「ビオス」(bios) と「ゾーエー」(zōē) の区別に立ち返り、自由で平等な対話行為の実践である「政治的生」と、自然の因果必然性のプロセスである「生物学的生」を厳密に区別した。さらに彼女は、前者が後者の領域に取り込まれ、喪失することを常に警戒していた。何故なら、「政治的生」は人間の複数性が現実化できる唯一の場であり、「政治的生」の空間の喪失は、人間が異質な他者とともに生きる自由である「政治的自由」の喪失に等しいからである。本研究は、この「政治的生」の空間の意義と、その現象学的構造を詳細にわたり解明する。

第二の課題として、本研究はアーレントの「共通感覚」が「他者と世界を共有する感覚」を意味することに着目し、「共通感覚」によって「現れの空間」としての世界がそのつど現実化・顕在化可能となることを明らかにする。アーレントの「共通感覚」は、彼女自身が明らかにしたように、カントの『判断力批判』第一部の美感的共通感覚を政治的共通感覚として読み換えた概念である。本研究は、アーレントの政治的共通感覚が、しばしば誤解されるような、個々人の歴史性から乖離した普遍的理性の原理でもなければ、ある特定の共同体内部の同一性を意味するものでもなく、「構想力」(imagination, Einbildungskraft) と「視野の広い考え方」(enlarged thought, erweiterte Denkungsart) によって成り立つことを解明する。換言すれば、「共通感覚」は、自分とは異なる「意見」を持つ他者とともに、ある共通の事柄について対話することを可能にする能力である。本研究は、「行為者」(actor) と「注視者」(spectator) が構想力と「共通感覚」を行使することによって、「現れの空間」を共に現実化していくプロセスを明らかにする。

第三の課題として、本研究は、「世界への愛」が「現れの空間」としての世界の「創始」(initiative) をもたらすことを明らかにする。「世界への愛」は、性愛・親子の情愛・キリスト教的な「神への愛」・共同体の保全を目的とした「同胞愛」等とはまったく異質の「愛」である。アーレントにおける「世界への愛」は、自己と他者の唯一性を尊重し、互いの「あいだ」としての距離を保った上で、なおも異質な他者と共に同じ問題について対話をしようと努める働きである。アーレントは「世界への愛」の解明を通じて、「同胞愛」的な共同体の在り方の危険性を、現代フランスの哲学者、J・デリダに先立って明らかにしていた。本研究は、画一的な価値観による排除と同化の暴力的構造が、人間的な「生」があらわになる場所を消失させる事態を明らかにし、異質な他者との対話を可能にする「世界への愛」の重要性を解明する。

本研究は、以下の論述構成によって本論の考察を展開した。

第一章では、アーレントの「生」概念の分析およびポリス概念の現象学的構造の解明を通じて、人間の「政治的生」が顕在化する空間が「現れの空間」であることが明らかになった。「現れの空間」の顕在化は、人間の「生のリアリティ」があらわになるために不可欠の条件であった。

第二章では、「現れの空間」を生み出す「政治的自由」概念の分析を通じて、「現れの空間」が顕現するために必要な条件を明らかにした。「政治的自由」は「構想力の自由」と「自発性」という二重の意味を有しており、「構想力の自由」と「自発性」が相互的に働くことによって、はじめて「現れの空間」が顕在化可能であった。さらに「構想力の自由」と「自

発性」は、「共通感覚」と「世界への愛」の働きに根源を有することが示された。すなわち、「共通感覚」と「世界への愛」は、「現れの空間」が顕在化するための条件であることが解明された。

第三章では、第二章で考察した「現れの空間」を顕在化する第一の条件である「共通感覚」の現象学的意味を明らかにした。本章はD・R・ヴィラおよびD・オルコウスキーによるアーレント解釈を手掛かりとしながら、「行為者」と「注視者」が、互いを同時に現象させるという意味での「共‐起源的」な関係にあることを解明した。「行為者」と「注視者」の間で形成される「現れの空間」は、「意見」の顕在化と現実化によって、かけがえのない「政治的生」の出来事を暴力的な隠蔽構造から救い出すものであった。

第四章では、「現れの空間」の第二の条件である「世界への愛」の現象学的意味について、M・ボレンの解釈を手掛かりとして明らかにした。本研究は、「世界への愛」と「同胞愛」という二つの「愛」の概念を対比させて考察することによって、「世界への愛」の固有性と、その喪失がもたらす人間存在の現れの危機を明らかにした。「共通感覚」と「世界への愛」は、「距離」と「接近」という二つの作用により「政治的生」の空間が人々の間に現れることを可能にした。「世界への愛」とは対照的に、「同胞愛」は同一性の原理によって人々の間の「距離」を消失させ、「政治的生」が現れることのできる唯一の場所である「世界」を隠蔽する危険性をもっていた。

第五章では、「共通感覚」と「世界への愛」が「政治的生」の空間を顕現させる構造を、「赦し」と「約束」の「共‐起源的」な相互作用を通じて解明した。さらに「赦し」と「約束」の源泉が「共通感覚」と「世界への愛」であることが明らかになった。したがって「赦し」と「約束」の相互作用とは、根源的には「共通感覚」と「世界への愛」の相互作用を意味した。これらの相互作用によって、はじめて「政治的生」の空間はそのつど新たに顕在化することが可能になるのであった。

本研究は結論として、次のような独自のアーレント解釈を提示することができた。

「現れの空間」は「政治的生」が現れうる唯一の場所であるが、しかし「現れの空間」は、自由で平等な言論活動が多様な人々の間で行われている間にのみ顕在化し、沈黙によって隠されてしまう不安定な場であった。換言すれば、「現れの空間」は、「共通感覚」と「世界への愛」によって「人間関係の網の目」が形成されることにより、はじめて顕在化ないし現実化することが可能であった。また、これらの働きはけっして単独で働くのではなく、相互に顕在化を促しあうことで同時的に現れるという「共‐起源的」な関係にあった。

上記の現象学的アーレント解釈の成果として、本研究は従来のアーレント研究における「観想と行為の二元論的対立」という誤解からアーレントの政治哲学を解放することができた。さらに本研究は、「共通感覚」と「世界への愛」およびこれらによって顕在化される「政治的生」の空間が、「同胞愛」による排他的社会構造に対する批判的理念として、重要な現代的意義を有していることを解明したのである。